

<資料>

日常に遍在する冒険

—— アルゼンチン編 ——

大 野 哲 也

キーワード：冒険，日本人移住者，アルゼンチン

1. 2017 年 3 月・ブエノスアイレス

15 年ぶりに訪れたアルゼンチンの首都ブエノスアイレスは、僕が覚えていたブエノスアイレスとはとんだかわっていなかった。

ただ、初めて訪れた 25 年前は、相当年季が入ったオンボロ車がモクモクと排気ガスを撒き散らしながらかつとばしていた街では、新型の自動車がビュンビュン行き交っていた。アルゼンチンが好景気に沸いているという話は聞かないが、25 年前と比べると、市民の暮らしには余裕が出てきているのかもしれない。「南米のパリ」と称される街並みは相変わらずスケールが大きくて美しい。おしゃれなカフェで堪能するコーヒーとクロワッサンも、レストランの店先で大きな肉を焼き上げるステーキの美味しさもまったくかわっていなかった。

僕がはじめてアルゼンチンに来たのは、1993 年末のことだった。自転車 で北米大陸を横断して、ニューヨークに到着した僕は、偶然、アルゼンチン最南端の町ウシュアイアから南極行きの船が出ることを知った。自転車旅行

を始めるにあたり、南極こそは、一度は行ってみたい場所ナンバーワンだった僕は、その話に飛びついた。

調べてみるとその船は、観光目的の客船ではなく、環境保護団体やジャーナリストや写真家らがチャーターした船だった。地球温暖化やオゾンホールなどが世界的な環境問題としてクローズアップされていたことと、今ほど南極が観光地化されていなかった当時、南極について報道することには大きな意味があったのだろう。そういう背景を持った船だったので、南極観光だけが目当てのツーリストは乗船お断りだった。

だが当時の僕は、自転車旅行記を新聞に連載していた。これ幸いとばかりに、それを利用して、ジャーナリストと名乗り乗船の申し込みをしてみた。僕は自分自身を「ジャーナリスト」や「写真家」だと思ったことは一度もなく、ましてや環境保護団体に属してもいなかったが、新聞連載という一点だけをみてみれば、「ジャーナリスト」の肩書は、100%嘘ではないような気がしないでもない。最真目に見積もって、限りなく黒に近いダークグレーといったところだろうか。ただ、「疑わしきは被告人の利益に」という言葉があるので、ここは僕の利益になるように判断してもらいたい。

ともあれ、先方からの連絡を待っていると、偶然一つのベッドにキャンセルが出たということで、乗船OKがでた。大喜びした僕はさっそくアルゼンチンに飛んだ。本当は自転車で南下したかったが、ニューヨークからウシュアイアまで自転車で行こうとすると1年ほどかかってしまう。もちろん船はそれまで待ってくれない。仕方がないので飛行機に飛び乗った。

僕は、1988年から1990年にかけて青年海外協力隊に参加していたのだが、同時期にパプアニューギニアに派遣されて現地で意気投合した友人のきんちゃんはアルゼンチンに叔父さんが住んでいた。僕が日本を出発するときにきんちゃんに電話をすると、叔父さんの住所や電話番号を教えてくれて「南米に行くときには、ぜひ叔父に連絡してくれ」と、心強いサポートを申し出てくれた。今回は、急に南米行きがきまったので大迷惑かとは思った

が、一応念のために連絡をしてみると、叔父さんが住む、ブエノスアイレスから400キロ以上離れた大西洋に面する、ビーチリゾートで名を馳せているマルデルプラタという町からわざわざ空港まで迎えに来てくれていた。事前にきんちゃんから「もしも大野という人から連絡があったらよろしく頼む」と、叔父さんに連絡が入っていたようだ。

そして「マルデルプラタだと、自転車旅行には都合が悪いだろう。首都ブエノスアイレスの方が、他国のビザを取るとか、何かと都合がいいだろう」と、こちらが恐縮してしまうほどの気遣いでもって首都ブエノスアイレスから西に約50キロほど離れたロス・モリノスという町に住む榎本家を紹介してくれて、僕をそこへ連れて行ってくれた。叔父さんは榎本家の長女とアルゼンチンで出会い結婚したので親族にあたる。これが榎本家のおじいちゃんとおばあちゃん、そして息子のかば（一穂）さん一家との出会いだった。

榎本家は、そこで広大な土地を所有して花卉農園を経営していた。僕が初めて居候をさせてもらった1993年は鉢植えの菊を何棟もののハウスで栽培していて、目が回るほど大忙しの毎日を送っていた。

そのような中で、初めて会うどここの馬の骨ともわからない僕を榎本家の人たちは心の底から歓迎してくれた。家の一室に通されて「自由に使っていいよ」と言ってくれた。だが、僕には居心地の良い空間でのんびりと過ごす時間的な余裕がなかった。「これから南極に行ってきます。1ヶ月くらいで戻ってきます」と言う、「南極なんて、どうやって行くの?」と皆が目を丸くして驚く中、自転車などの荷物を置かせてもらい、ニューヨークのアウトドア店で揃えた南極仕様の衣類だけを持ってバスを乗り継ぎウシュアイアを目指した。

南極大陸から流れ込む強風が吹き荒れるウシュアイアに到着して、すぐに港に行ってみると、停泊している船の船員はジャーナリストを名乗る僕を疑うことなく、あっさりと乗船させてくれた。ただ、船の中では、親しくなった人たちに自己紹介がてらどのような記事を書いているのかを話さなければ

ならない場面があり、その時には冷や汗をかいた。

航海自体は順調だったが、「世界で最も荒れる海域」という異名をもつドレーク海峡は、この日も大荒れで、船は上下、前後、左右に揺れに揺れた。「引き返そう」「転覆するんじゃないか」「アルゼンチン海軍に救援要請をしたほうがいい」と案じる者もいるほどだった。中には「なにかあったら誰が責任を取るんだ」と船長に詰め寄る者もいた。とにかく天候が悪く、船は大揺れし続けた。そんな人たちに対して船長は「左右ならば60度までは傾斜しても大丈夫」と豪語して、無理やり、我々を安心させた。ただし南極大陸に到達すると、うそのようなべた風が続き、漆黒の海に浮かぶ巨大な氷山や純白の南極大陸は雄大で荘厳だった。

元日を挟んで1ヶ月の南極滞在をしたあとは、ふらりと立ち寄ったアルゼンチンに聳える南米大陸最高峰アコンカクア（6960 m）に登頂したりして、南米を満喫した。その後はパタゴニア地方を気の向くままに旅をして、2ヶ月半ぶりに榎本家に戻った。

そこから僕の長い居候生活が始まった。

僕は、仕事の合間を縫っておじいちゃんとおばあちゃんに昔話を聞くのが大好きだった。ペルーやブラジルに多くの日本人が移住したということは知っていたが、アルゼンチンに日本人が移住しているとは知らなかった。だから、おじいちゃんが木訥と語る移住物語という冒険譚に大興奮した。

僕は榎本家で3ヶ月ほど居候させてもらった。その後、自転車旅行を再開し、南米大陸を縦走し、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアを旅して5年後に日本に帰国したのだが、文化人類学を学ぶために大学院に進学したとき、研究テーマに選んだのは血湧き肉躍ったおじいちゃんの生き様だった。

僕は、2000年から2002年にかけて、時間が許す限りアルゼンチンに行き、榎本家に居候させてもらいながら家族の人たちや他の日系移民の方々からライフヒストリーの聞き取り調査をした。

以下は、僕が移民研究をしているときに調べ、おじいちゃんとおばあちゃ

んから聞いた、彼らの冒険の物語である。

2. 1926～1954・和歌山

理一さん（おじいちゃん）は1926年、和歌山県日高郡のある村で和田家の8人きょうだいの長男として生まれた。地元の農業高校を卒業後、実家の農業を継いだ理一さんは20歳の時に召集され、東北地方で兵役に就いた。約半年で敗戦を迎え故郷に戻った理一さんは、ほどなく和田家の親戚にあたる榎本家に養子として赴き結婚する。相手は同い年で、やはり榎本家とは親戚にあたる和歌山県西牟婁郡の竹中家の長女、澄代さん（おばあちゃん）だった。榎本家は唯一の男子を戦争で失ってしまったので、理一さんが養子に入り、和歌山県田辺市の榎本家と同家が所有する山林や田畑といった財産を守るということが、結婚の目的のひとつだった。

「とにかくあの近辺ではまあまあ、普通以上の財産はあったんだ。農地改革、農地改革、ちょうどその当時よ、農地改革。うちには、よその村には（田畑は）なかったけれども。その財産の上に座って、生活やればいいけども……。今売ったら、何億になるか知らんけど。山も持ってた。山は、近辺で海岸から見が一番高い山だったから。畑では、山開墾してから、みかんや梅やとか（をつくっていた）」

和歌山県の見解では、田辺市付近は、一人当たり1.1反以上の耕地面積を有する非出稼ぎ地区で、このような比較的所有面積の多い地域は出稼ぎの必要が認められないという（和歌山県1957：120-125）。理一さんの場合も、この事例に当てはまると言ってよい。和田家、竹中家の長男、長女だったにも拘らず、養子に入ってまで榎本家と榎本家の財産を守ろうとしたことから、それは容易に推測できる。

結婚後、理一さんと澄代さんは農業を始めた。しかし毎年起こる災害に二

人は泣かされ続けた。1947年は紀伊半島南東沖地震、48年はアイオン台風、49年はデラ台風が襲来した。50年はジェーン台風、51年はルース台風、53年は「7.18大水害」が同地方を襲い、芳養町に床下浸水100戸などの被害をもたらした（田辺市1982：229、南部町誌編纂委員会1987：163-164）。榎本家では災害のたびに土地が流されるので、土入れ、地ならし、田植えのやり直しや床下浸水の後始末は年中行事だった（榎本1956：94）。

「台風は毎年来たけども、最後の大きかったのがジェーン台風いうて、そうだったかな。ジェーン台風。それで和歌山の有田方面は、全部水害で流されちゃったんだよ。日高川、有田川はね、耕地はほとんど水に浸かって。（榎本家も）やられたよ。そいで思い切って（アルゼンチンへ）出て来たんだ」

榎本家では1948年に長女が、52年には男子と女子の双子が誕生する。ところが次女は病弱で、理一さんと澄代さんの心労は絶えなかった。そこで、気候がいいアルゼンチンへ移住すれば、次女健康も回復するに違いないと理一さんは考えた。

「あの子（次女）には、毎日のように医者とか、結局、医者変えて良くなったんだけど、マイシン中毒だったんだよ。いろいろマイシンあったでしょ、出た当時。あれで中毒。頭の毛まで全部はげちゃったんだから、病気で。その頃弱とったんだ」

さらに当時、海外移住政策は「国策」だった。全国的にみても移住者の主要な送り出し県であった和歌山県は、1940年の時点で1万9809人の県人が海外で生活していた。52年から56年の5年間では1961人が海外へ移住し（和歌山県1957：1101）、66年までの15年間では3229人が移住者となった。移民数では全国8位、人口比では全国1位である（田辺市1971：693）。

「結局、大戦以降、日本は食糧難で、戦争行って、どんどんどんどん殖民して来て、人口がどんどん増え、どうしても政府としては人口減らしたかったわけ。だからブラジルに行ったらどれだけの土地をくれるとか、今問題になっているドミニカ行ったらどうやとか『出て行け、出て行け』言うて、出したいばかりなんだ。だからブラジル行った人なんか、かわいそうなもんだったんだよな。新聞で何月にはどここの県が何千人出航するやとかね、そんな景気のいい話、いついつ、いくか、なにに丸で何千人、何百人出航するやとか、そういうことよく（新聞に）出とったよ。それを（榎本家の田畑）全部売り払ってこちら（アルゼンチン）へ来たんだ」

理一さんの移住動機はひとつだけではない。災害、次女の病気、国の海外移住政策など、様々な要素が複合していた。

一方、第二次大戦が契機となって、戦災を免れたアルゼンチンは空前の経済発展を遂げていた（服部 1986：92-93）。アルゼンチンで発行されている邦字新聞「らぶらた報知」が1955年2月2日に「まじめな移民 亜国は大歓迎」と報じているように、労働力確保のために同国は、さらなる移住者、特に欧州系移民を欲していた。

このような背景を受け、日本人移住者も日本の高度経済成長が始まる1960年代前半まで増加の一途を辿った。

またこの頃、すでにアルゼンチンに移住していた澄代さんの叔母が頻繁に手紙を送ってきて、二人に強く移住を勧めていた。

叔母からの手紙でアルゼンチン社会の状況を把握し、「遠い叔父叔母の好意だけが、私たちの頼みの綱だつた」理一さんと澄代さんは、ついに移住を決意する。しかし「古い家なので、親類の人々がこぞつて複雑な表情を見せ」た（榎本 1956：94）、と澄代さんが記しているように、榎本家の財産を守るという二人の結婚の目的を考えると、彼らの決断は周囲から祝福されはしなかった。

「(移住を) 決意したのは、昭和 29 (1954) 年に出たから、28 年ぐらいだったんだろう。もう、そういうことはわからん、覚えてない。(それについて澄代さんは) どうだったかなあ。あまり、(田畑が) 水で荒れるもんだから。何にも覚えがないけども、『行く』言うた時、おやじが土間で泣いとったことだけは覚えてる。行く準備は、やっぱり財産売ってからでないとできないから。全部いっぺんに一軒の、ひとりに売ったんじゃないから」

日本人移住者の多くが、「錦衣帰郷」を目標に抱いていたとすれば(前山 1986: IV), 理一さんは一般的な「移民」のイメージから、はずれている。様々な移住動機を語っていることから、移住の決断に際して理一さんの心には、他者には窺い知れない複雑な背景があったのだ。

「一番大きな買い物はやっぱりオートバイだっただろうな、一番金のはったのは。22 万くらいだったと思うんだけど、当時で。メグロ 250 だった、持って来たのは。他は、家財道具いっさいだもん。行っすぐ生活できる程度の道具は、所帯道具全部。量にしたら、箱にして 5~60 箱あったんだろう。一番大きいのは、やっぱりオートバイだな、箱詰めしたから。頼まれ物は持ってこないわけにはいかないから持って来たよ。全部、それだけは。どんな物だったかも覚えてないけれどもなあ、写真機の、時計の、編物機の、なんかいろいろあったよ。それだけで、(1 箱) あったよ、じゅうぶん」

この理一さんの語りからもわかるように、彼は経済的な困窮が理由で、移住を決断したわけではなかった。というよりも、経済面だけをみるならば、彼らは移住する必要性などまったくなかった。

「やっぱり出稼ぎ気分で行かないと、親達は承諾しなかったもんな。皆を安心させるためか、外国へ出るためには、そういう口実かなんか知らない。『5年経ったら帰ってくる、10年経ったら帰る』そういう気持ちでいたんだけど、どっこいそうはいかなかった。一応、戻ってこようとは思ったんだ。(財産を処分する必要はないが)一応、持って行かないと気がすまなかったんだろな」

この場面で理一さんは、「移住」ではなく「出稼ぎ」だったと語っているが、「錦衣帰郷」が目標で、数年後に帰国するつもりだったならば、養子になってまで守ろうとした榎本家の財産を、出発前に全部処分する必要はなかったはずだ。

「(出航は)神戸から。(19)54年5月末だ、6月1日に横浜出たんだから。(和歌山から神戸までは)オート三輪で、(荷物も)1回で行ったみたい。神戸の移住センターいうて、六甲山の麓あたし、高いところにあったよ。あれはだいたい、移住者と共で600人ぐらいいたからな。移住センターで、家内のキョウダイからみんなで一晩部屋を借りて泊まったんだ。(出航するときには)皆泣いて別れたんだけど、別に若かったからなあ・・・冒険したもんだよ」

他の機会に理一さんは、船中の様子について「移民はカイコ棚のようところへ寝かされて、かわいそうなものだった」と語っている。このことは、理一さんの当時の心象をよく物語っている。理一さんは、アルゼンチンまで「客室」で過ごした自らと、他の「移民たち」との間に一線を画しているのだ。理一さんは、決して、「経済的に困窮して、(仕方なく)新天地を求める」という「かわいそうな移民」の一人ではなかったのである。

「旅費はねえ、日本金40何万（円）払ったと思うんだけど、そこところはっきりわからん。船の中では闇ドルを買ったり。あの人たち（ブラジル・ベレンで降りた人たちは）売ってたから、船の中で。（1ドル）420円ぐらいやったと思う。（日本を出る時、ドルの持ち出し制限があったが）そういうことは全然わからなくて、少しは金持っていけないかんと思って用意しとったところ、ひとりに30ドルしかくれなかったんだよ。ひとりに30ドルじゃあ、家内中で100ドルくらいしかない、子どもも入れてね。子どもひとり、年齢によって半額やとかそうなる。だから、（一家で）100ドルくらいしかないんだよ」

1954年7月21日付の「らぶらた報知」の「商船々客名」という記事には、榎本家5名の名前が掲載されている。同紙によれば、あふりか丸でアルゼンチンに移住したのは榎本家を含め、計11名だった。

ところで、アルゼンチン上陸後、理一さんはさっそくトラブルに見舞われる。新車のオートバイが入国の際に税関を通過せず、事実上没収されてしまうのだ。

「（アルゼンチンでは）日本円は替えない。ここ（アルゼンチン）へ来ると、ドルのほかになかったんだろうね、ドルだけだよな。1ドルが闇で16ペソだったんだ。（入国は）スムーズに。ただ、オートバイだけ。没収じゃないんだけど、どういうのかな。来た当時だから全然、ちんぷんかんぷん。言葉は当然、方角もわからないんだから¹⁾」

1) 澄代さんはこの経緯について「ここで1万ペソ（1ペソ=100センターボ。日本金の約10万円）する軽二輪車が、ついに税関で没収されたこと」（榎本1956：95）と記している。なお、理一さんは、聞き取りの場でオートバイは「22万円」だったと語っている。澄代さんが詳細な日記をつけていたことを考えると、「22万円」は理一さんの記憶違いと思われる。

当時のアルゼンチンは、ポピュリスト政治を標榜するペロン大統領の時代だった。ペロンはこのとき経済の第2次5カ年計画を推進していた。しかし、高賃金政策がインフレを誘発し、国民経済は大混乱に陥っていく。しかも、予算の大部分が政治家自身の私腹を肥やすものに投資された。その結果、1946年から10年間の物価上昇率が、450パーセントという猛烈なインフレを記録するに至った。社会の下層に位置する日系移民たちの受けた衝撃は尋常なものではなかった。

3. 1954～1961・サン・ペドロ村

榎本家の5人は叔父・叔母が所有していたコルドバ州サン・ペドロ村にある土地を任され、農業を営み、アルゼンチン生活の第一歩を踏み出した。しかし、広大な土地で行う農業は日本式の方法がまったく通用しなかった。加えて、生活習慣や言葉の違いが大きく、彼らの日常は戸惑いだらけだった。

「ジョ（自分）たち行った時には、（叔父の畑は）20町歩くらいあったかなあ。広いよ、日本から来たらたまげるくらいな。山もなんにもないんだから、近所からずーっと。（だけど）20町歩で全部作れないんだ、水がないから。夏になるとだいたい2～3ヶ月、雨降らないからね。4町か5町ぐらい使ったかな。けど、最初行った時は作り方も知らなければ、耕し方も知らん。日本では、鍬ばっかしだもんな。ここで鍬なんか使ったんじゃ、鍬なんかすぐ減ってしまうよ。馬でこう畑をくるーっと、鋤で回るんだけど、隅々はもう回らないんだよ。4メートルか5メートルまわりの間は、そのままほっておいてね。日本だったら隅々まで鍬を使うんだよ、もったいないから。ここはそうじゃないんだ。馬のまわるとこと、鋤の通る間だけ使って、あとはもう（やらない）。『やっぱりなあ、大きなところはやっぱりこうかな』と、それは思ったけどな。鋤も知らなければ、種の植え方も知らないんだから」

理一さんは、当初の苦労を予想して、多くの日本製品をアルゼンチンへ持参していた。そして農業が軌道に乗るまでのあいだ、それらを現地の人たちに売ることによって食いつないだ。移住初期の苦難の時期について、澄代さんは「土地事情も農法も、すぐさまのみこむことができず、下手ばかりしたこと。また折角できた西瓜やメロンは、その年にだぶついて、新顔、しかも言葉のわからない私たちは、売り口をつかむことができず・・・一年目の夏は収入らしい収入はなく、まことにさんざんなものでした」（榎本 1956：95）と書き記している。

「（収入あるまで）売り食いさ、売り食い。そうだね、言葉がわからなければ、片言かなんかで通じるもんだよ。やっぱり外国人って言うのは、そういう勘があるんかね。売って金貰ったんだから。とにかく日本から持ってきたもん、珍しがるから。たとえばねえ、ばあちゃん（澄代さん）やなんかはネッカチーフやとかあ、それから首輪。そういうものは貴金属じゃなくって、貝で作ったとか。（初めから売るつもりで）そういうのはだいぶ入とったから、箱に。ネッカチーフやとか、首飾りやとか」

結局、サン・ペドロ村での生活は順風満帆にはいかず、理一さんと澄代さんは叔父・叔母のもとを離れる決心をする。そう決意させたのは、またしても災害がきっかけだった。

「（サン・ペドロ村には）3年いれなかったんだから、電にやられて。天災にあって、2年半だ。3年の契約だったんだけど、もうお手上げ。農作物が全滅して、それで思い切って出たんだよ。鶏卵大ぐらいだろうな、朝早く（降った）。向うは砂地だから、雨降った後でそういうの降ると、馬鈴薯なんか（に電が）全部入ちゃうんだよ。だから馬鈴薯も全部だめ。唐辛子も全部、葉っぱもなにもない。軸だけ残って、みな落ちちまう。ト

マトをそこへ作とったんだけど、それも支柱だけしか残らんかった」

だが彼らの本当の苦難はここから始まる。一家はまずブエノス・アイレス州エスコバルへ転住した。村で知り合った和歌山県出身のある日系移民の男性が誘ってくれたのだ。二人の花づくりはエスコバルで始まった。しかし半年後、同州ドン・トロクアトへの再転住を決意する。

「最初入ったのは、同県人の家。頼って行って、部屋は貸してもらったわけだ、離れをね。(県人のつながりが) あるねえ、そういうのはあるよ。外国ではお互い懐かしいんだよ、親類のような」

アルゼンチンにおける花卉栽培は、1919年に高市茂らがブエノス・アイレスのペドロ・ゴゼナ街に花屋を開業したのが始まりだという。以来、1939年には132人だった花卉農園の経営者は62年4月には601人へと急増した(日本人アルゼンティン移住史編纂委員会1971:195)。同国では「日本人がつくる花はでががいい」と高品質の評価を受けている。

榎本家では、理一さんが近くの農園へペオン(農園労働者)として働きに出る一方、澄代さんはその日系移民から土地を借りして、カーネーションの切花づくりを始めた。

「(ペオンは)土日は休み。(しかし自分は)土曜日は半日働いた。どこも行かずに温室ばっかし働き通し、祭日も何もなし。(ドン・トロクアトでは)3年ぐらいいたかな。あそこでペオンしながら、温室を買って隣で土地を借りて、ばあちゃんがあそこで花づくりやとったから。そこで最初の基盤を作って、ここ(ロス・モリノス)へ来たわけだ。(温室は)6棟ぐらいやとったと思う。カーネーション(の切花)。1棟(の大きさ)がだいたい6メートルの40メートルだから、うちのはね。(その頃、景気

は)良かった、面白かったな。(つくった花は)全部売れた。残るっちゅうことは、まずなかったよな」

その後、理一さんらが頼っていた日系移民の男性は、養鶏業に手を出して失敗してしまう。そのため、彼の保証人になっていた理一さんは、借金を肩代わりしなければならなくなった。しかし、返済を続けながらも、好景気も追い風になって、プエノス・アイレス州ロス・モリノスに、ついに念願だった自分名義の土地を手に入れる。

4. 1961～現在・ロス・モリノス

榎本家は1961年に、ロス・モリノスの2町半の土地に新居を建築して移転した。当時は景気がよく、土地代をわずか2年で完済してしまうほど花は売れに売れた。

「(ロス・モリノスの土地を手に入れたときには)嬉しかったよ。ばあちゃんも喜んだんだから。だからこの土地は、ばあちゃんも一生懸命働いたから、わしとばあちゃんのになってるんだ、名義が。(日本人は)一応自分の土地は欲しいと思うよな。それが日本人なんだよ。自分の財産、やっぱり日本人はそれなんだよな。日本は封建制っていうんか、昔から島国根性でしょ、(土地に)愛着心がある」

澄代さんはその時の気持ちを「ああ、ここで死ねるって思って嬉しかったあ」と僕に語った。田辺市に所有していた「普通以上の財産(土地)」を処分してまで移住した彼らの念願は、日本で生活していた時と同じように、土地の所有だったのだ。

「(ロス・モリノスでも)カーネーション。売れたよ、あの当時は。鉢

物でも全部売れたし。(鉢物に切り替えて) 20 年ぐらいになるかな。とにかく、ここではジョ (自分) が一番最初だったんだから。あましょく売れるもんだから、みんなが真似しだして全部鉢物になっちゃった。最初はねえ、菊から始めたね。菊とそれからシクラメンとやったんだ。だけど、作付けとベンタ (売り) がシクラメンと一緒にかち合うもんだから、忙しいからひとつに固めたんだけど。年間 5 ～ 6 万 (鉢) はつくっただろうな。だからシクラメンやめて菊にしたんだ。(それが全部) 売れちゃった。それも、値段はこちらの言い値でな」

榎本家は花卉産業の好調に支えられて経済的に安定して、現在に至っている。

また、74 年に長女が、82 年には次女がそれぞれ日本人とアルゼンチンで結婚した。長男も 85 年に日系二世と結婚し、「結婚相手は日本人でないと。そりゃそうだよ」という理一さんの希望も叶った。彼は異国の地で、日本人としての自覚と誇りを持って生きてきたが、子どもたちも日本人として生きていってほしいという願いがあるのだ。これは理一さんが、日本人の「特性」について語っている次の言葉からも容易に推測できる。

「(アルゼンチンへ来て、自分が日本人だということを忘れたことは) それはないな、それはない。ここでは日本人はとっても評判がいい。それを崩さないためには、『俺は日本人だ』っていう考えをもたないと。その信用っていうのは、先輩たちがつくってくれたんだろうけどね。また、それを 2 世 3 世に譲っていかないかんわけだ。日本人はまじめで人を騙したり嘘ついたりしないからな。それだけ日本人は信頼されてるんだ」

1958 年、アルゼンチン大統領のアランブルは「日本人の精励、勤勉、そして正直は我々の賞賛的だ。・・・もしわが国の国民が皆、日本人ある

いはその二世だけだったら、恐らくわが国に警察というものは要らないでしょう」(津田1984:36)とまで、いささか誇張気味に賞賛している²⁾。

「日本で少々グレてても、こっちへ来たら真面目になるんだ。やっぱり日本人としてのメンツがあるからな。アルゼンチンのほうでも、そういう日本人に対する思いを引き継いでいるんだろ。それは感謝しとる。昔から比べたら、我々の考えからみたら(最近の日本は)『ほんとにだらけてきたな』とは思う。殺人の、強盗のねえ、泥棒の、こんなに変わったんかな」

批判の予先は、墮落した日本在住の日本人に向けられるが、これは理想化し、イメージされた「善良で真面目な日本人」への強迫的ともいえる同調を促すことに繋がる。「すっかりダメになったお前たちとは違い、我々こそが本来の、真正の日本人のあるべき姿なのだ」という現今の日本人への批判と、正統的な自己確立の表現とは、表裏一体のものなのだ。

5. 記憶の再構成と重層化

聞き取りの場では、理一さんは、「移民は棄民」的な移住動機と「錦衣帰郷」を核としたライフ・ヒストリーを語った。しかしその一方で、理一さんはそこから漏れ落ちるような語りもおこなっている。

たとえば、1975年4月5日に和歌山県の地方紙「紀伊民報」に掲載された理一さんに関する記事には、「広い土地で思い切り農業をやってみたかった」——農業を営む日系移民に聞き取りをすると多くの人はこう語る——とあり、理一さんはロマンティックで冒険的な(範型化された)移住動機を語っている。

2) 1954年のペロン大統領の談話など(海外移住1954年9月20日)、日本人を賞賛する記事は枚挙に暇がない。

ところが2週間後の4月18日の同紙に掲載された手記では少しニュアンスが異なってくる。「来る年も来る年も洪水に見舞われて流れた田畑を修復しても年毎にくずされ、何一つ希望の持てない日々でした。二十一才で結婚した私は、八年間頑張^{ママ}って見たがすべては徒労でした。その頃アルゼンチンに在住の叔母から渡米せぬかとの便りに、渡りに船と呼び寄せ移民として新天地を南米に求め」た、として、水害を主たる移住動機として語っているのである。

しかし澄代さんが「どうやら暮らしてゆけないことはなし、水害で苦しいのはお互いさま」（榎本 1956：94）と記しているように、榎本家は当時、経済的に逼迫してはいなかった。加えて、一人当たり1.1反以上の田畑を所有している「イエ」は出稼ぎの必要がないという和歌山県の見解を考慮すれば、理一さんが手記で述べた経済的な移住動機が主たるものであったとは思えない。さらに、理一さんが榎本家へ養子に入った経緯を考えれば、「紀伊民報」へ語ったロマンティックで冒険的な移住動機もまた主たるものとは考えられないのである。

一方、澄代さんはまったく違う移住動機を語っている。移住を決意したのは「双生児、しかも男と女の子が生まれたから」だった。「これは因業によるものですよ」と村人や親戚のあいだで噂され「好奇と蔑みの視線」を感じた彼らは「あなたたちがのびのびと楽しく暮らせる国へ行こうね」と「小さい二人の頬に涙をこぼしながら、決心した」というのだ。そして「アルゼンチンは、人種差別のない国です。・・・いらつしやい、待つてますよ」と移住を勧める「叔母の手紙を手に、大反対の親類、父母を説得し」た、というのである（榎本 1956：94）。1950年代に書かれた手記のなかで澄代さんは、いわば村落共同体の「因習からの解放」を移住理由に挙げていたのだ。

さらに、理一さんは移住前に「10年経ったら帰ってくる」のならば必要がない、榎本家の永代供養までも済ませていた。

「(19) 54年、先祖の墓、先祖の供養、100年の供養、全部終わって来たんだ。そして、位牌だけは（アルゼンチンへ）持ってきてるけど。100年いったら、永代供養のもんだよね。永代供養はして来た」

このように移住動機ひとつをとってみても、個々人によって、またその時期や状況によって語りの内容は変異している。そこで理一さんに、その整合性を改めて尋ねてみると、彼はしばらく考えて、きわめて印象深い言葉で説明してくれた。

「だからそのところは、なにがなんやら、もうさっぱりわからんよ。自分でもわからんよ、今考えたらな。つじつまが合わない。行き当たりばったりで来てるんだよ。だから、もう少しじっくり考えてたら、こんな南米までは来なかったんだよ」

理一さんの生き様を理解しようとするとき「なにがなんやら、もうさっぱりわからんよ」という語りは、きわめて重要な意味を持つ。それを理解するためには、当時の移民の社会的背景を確認しておく必要がある。

理一さんが「紀伊民報」に語った「広い土地で思い切り農業をやってみたかった」というロマンティックで冒険的な移住動機は、日系移民への聞き取りでは頻繁に出てくるものだ。この典型的な語りは、日本社会の移民に対する棄民意識と密接に関わっていると言ってよい。当時、移民層を輩出していたのは、農山漁村の最困窮層ではなかったものの、出身社会から周縁化されたか、されつつある階層だった。こうした人びとは、理一さんが語ったように、国が推進する移民事業に自分たちの立身出世の夢を託しながらも、母社会に対しては屈折した棄民意識を抱えていた。彼らはそれを熟知していたからこそ、ロマンティックで冒険的な移住動機を典型的に紡ぎ上げていったのである。それは、母社会からの「移民は棄民」的眼差しへの彼らなりの自己

確立の手段に他ならなかった。彼らが強調する「アルゼンチンへ夢とロマンを求めて旅立つ」という冒険は「移民は棄民」的眼差しが持つ負のイメージを、肯定的で自尊感情を引き起こす自画像へと転換させる有効なレトリックだった。

また、その2週間後に理一さんが手記で明らかにした水害による移住動機は、和歌山県民にとっては理解されやすいものだ。和歌山県民は毎年のように壊滅的な被害をもたらす風水害に非常に苦しめられていたので、県民にとって「災害→移住」という図式には説得力があるのだ。このような地域特有の背景に馴染んでいるからこそ、「紀伊民報」という地方新聞に寄稿した手記で、理一さんはこの移住動機を語ったのである。

さらに、理一さんは移民船乗船の当初から、自分たちと「移民」との間に一線を画していることは前述した。その語りが明示するように、理一さんが持っている移民像は、日本社会で流通している「日本社会で食っていけない者が海外に飛雄する」という冒険的な「貧困モデル」そのものだった。ところが僕の移民研究のためのライフ・ヒストリーの聞き取りは、「移民」であることを拒む理一さんに「移民の話」を語るように要請するものだった。理一さんは、この「的はずれ」な僕の要請を拒絶するのではなく、むしろ積極的に応答する形で、一般に流通している「移民は棄民」的な移住動機と「出稼ぎ気分」を語っていった。つまり理一さんは、自己を納得させ他者を説得するために、換言すれば、自己の置かれた状況（場面）や周囲の環境に適応するという意味で自己を確立するために、その場の自分に最もふさわしい「自己」の語り口を選択し、それを自然で所与のものとして口述したのである。

理一さんは当然、そこから生まれる矛盾と不整合に気づいている。その「気づき」を理一さんは、「なにがなんやら、もうさっぱりわからんよ」と表現しているのである。したがって、「移住動機の真実」を数ある説明から探り当てることに意味はない。様々な状況（場面）において理一さんは異なった移住動機を口述するが、重要なことは、それぞれの場において理一さんが

「リアリティ」を語っているということだ。錯綜する説明の語り群を併存させ葛藤させる創発的な構築作用を経て、パーソナルなヒストリーが様々なバージョンを伴って生み出され、それらの物語の束を土台として、「冒険的な海外飛雄」と「正直で勤勉に生きていく」ことをキーワードとする、集合的で柔軟な「自己」が生成されているのである。

6. 日本人より日本人らしく生きる

日系ブラジル移民がブラジルの地に上陸して初めて「日本人になった」と言う前山隆の表現を借用するならば（前山 1984：448）、日系アルゼンチン移民はアルゼンチンの地に上陸して初めて『『真正な』日本人を想像し、『真正な』日本人になることを選択した』と言ってよいだろう。

欧州系移民優位のアルゼンチン社会で、日系移民たちは、ときに被差別感を味わいながらも現地社会と摩擦を起こさずに生きる必要を感じた。そのために彼らは「正直で勤勉」な民族イメージを再構築し、そこに集合的に同一化する道を選択していった。こうして、理想化した「日本人」に強迫的とさえ言えるほど同調する過程で、アルゼンチンの主流派社会から「居場所」を与えられたのである。

つまり日系移民たちは、自らの意志と努力によって、マジョリティ社会が日本人に期待した日本人像を再想像し、集合的にその「日本人」になることを選択したのである。そのプロセスは、決して、ホスト社会における文化的差異を痛感し、自らの「正直で勤勉さ」に覚醒したわけではなかったのだ。

こうした「日本人」の構築作用は、理一さんの語りからもわかるように、日本社会からの移民に対する負の眼差しへの防波堤効果も果たしている。彼らは、「日本人より日本人らしく」振舞うことによって「棄民」という恐れと「貧困モデル」を払拭し、現在の「墮落した日本と日本人」と立場を転倒させることを可能にする。この立場の逆転により、ようやく日系移民は「移民は棄民」的の眼差しから解放され、日本人としての「正統性」を獲得できる

のである。

欧州系移民が中心となってつくりあげられているアルゼンチン社会という日系移民にとっては過酷な異文化において、日系移民が「生き方」を模索するなかから編み出された「日本人」は、「正直で勤勉」という、マジョリティ社会にとって「牙のない」イメージを核として、ホスト社会に根づいていった。もちろん、現実の日系社会においては借金の踏み倒しや約束・契約の一方的な反故といった「不正直」が日常的に生起している。しかし、こうした現実を「例外化」して「日本人の恥」化することで、かえって「正直で勤勉」イデオロギーは補強され、それにもとづく「日本人」もさらに強化されていく。それがまた、マジョリティ社会からの評価を確定する。こうした連関・連鎖によって、アルゼンチンの日系移民社会における「日本人」は、日々更新されている。

理一さんが口にする「なにがなんやら、もうさっぱりわからんよ」というフレーズは、日系移民社会が育ててきたこの雑種的で可変的な日常的実践の可能性と、それによる「日本人」を再想像するダイナミズムを的確に表現したものであったのである。

7. 2017年3月・地平線まで広がる青空の下で

現在、おじいちゃんは花卉栽培からは引退し、長男のかぼさんと妻のローサさん、そして長女のリアナがあとを引き継いでいる。おじいちゃんは、家庭菜園程度の野良仕事をするのが日課で、ちょっと耳は遠くなったが、日焼けしたその顔は元気いっぱいだ。

かぼさんとローサさんは、1年に1回、車で国内外を旅行するのが恒例になっているようで、「今年は10日間ほどかけてアルゼンチンの北の方をぐるっと回ってきた」と言っていた。

榎本家は、僕が居候をしていたときは菊の鉢植えを主力商品としていたが、現在は多肉植物に特化していて、その経営は順調のようだ。週末には、

車で30分ほど行ったところにある町モレノの駅前広場でマーケットを出店している。僕が駅前広場に行った時には、25年前は、少女漫画を描くことが大好きで、お母さん子で、動物好きで、小学生だったリリアナが、いまやすっかり大人の女性になって大勢のお客さんを相手に奮闘していた。

長男のエリクは、こちらも立派な体格の青年になっていて、現在はブエノスアイレスにあるコンピューター会社に勤めている。自宅から職場までは50キロほどあるが、毎日自家用車をかっぱして通っている。自宅近くに高速道路のインターチェンジがあるので、それを使えば時間はそれほどかからないそうだ。

おばあちゃんは、2012年に亡くなった。「おばあちゃんの墓参りがしたい」とかばさんをお願いすると、ローサさんが農園の一角で自宅の装飾用につくっている花をたくさん用意してくれた。その花を持って、車で10分ほどのところにある墓地にかばさんが連れて行ってくれた。

墓地は手入れが行き届いた美しい芝生が広がり、鮮やかな緑色の大きな木々が森のように連なるまるで公園のようなところで、日本の墓地とは雰囲気まったく違う。

ふと見上げると、雲ひとつない真っ青な空が地平まで広がっていて、澄んだ空気は気持ちよかった。

木々は柔らかな風に揺らいでいる。

かすかに芝生の香りがする。

「おばあちゃんは、さぞ寝心地がいいことだろう」と思った。

僕は、おばあちゃんの名前が刻まれたプレートの前で手を合わせた。

おばあちゃんの人生は、とても苦労が多かった。子どもの頃は読書好きで勉強好きだった。学校の成績が優秀で医者になることが夢だった。おそらく、何事もないればその夢は叶っていたことだろう。だが、医者になるべく高等医学専門学校への進学希望を口にしたところ、ある人から「女、まして長女なんだからそんなことを考えてはいけない」と強く諭されたという。

東京や大阪などの大都市ならば、個人の選択がもう少し尊重される、あるいは個人が自己の意思に従って自由に振る舞える、そんな雰囲気があったはずだ。だが、和歌山の地方では、「女はこうあるべき」「男はこうあるべき」というような性別役割にまつわる因習が色濃く残っていたのだろう。結局、医者になる夢は諦めざるを得なかった。

おばあちゃんの人生は、戦争と、和歌山の地方で生まれ育ったという境遇と、竹中家の長女に生まれた自身の立場と、榎本家の後継という自分ではコントロールできない要因が積み重なって、大きく変転していった。

結婚後は、引き継いだ財産を全部売り払ってまで強行した海外飛雄だったが、アルゼンチンという土地はおばあちゃんが夢見ていたような楽園ではなかった。異国の地で流転しつつ、土まみれになりながら必死で働き、ようやく安住の地を得ることができた。人生の後半は平穏無事な日々だったかもしれないが、日本に対する、あるいは故郷に対する恋慕のような、切ない感情はずっと抱き続けていたようだ。

自分の人生を振り返ったら、「まさか」「こんなはずじゃなかった」の連続で、夢にも思わなかったことだらけだっただろう。だがおばあちゃんは、そのような苦労や愚痴を、僕に対して決して話さなかった。僕に昔話を語るたびに「これでよかったのよ」というような言葉——そう語ることによって自分自身を納得させていたのかもしれない——を口にした。きっと誰に対してもそのように接していたに違いない。人の悪口は絶対に言わない、いつも前向きに、だが控えめで、他者に対して優しく、その時々を一所懸命生きている人だった。

南極のあと、アコンカグアに登頂して榎本家に帰ってくると、登山で泥まみれになった僕の服を、「洗濯機では汚れがきれいに落ちないから」と外の水栓で手洗いしてくれていた小さな後ろ姿は今でも目に焼き付いている。

おばあちゃんは、移住して以来、毎日日記をつけていた。古くてもう「時効」になっている日記を何冊か読ませてもらったことがあるのだが、達筆

で、表現力が豊かで、詳細で、几帳面な文章が流れるように綴られていた。だが、そこにも心の苦悩は一切書かれていなかった。日記という自分だけの領域においても、自分自身を厳しく律していたのだろう。

今でも折に触れて、台所でおばあちゃんと四方山話を咲かせていると、時々、どこから手に入れたのか、大きな椎茸を僕のために網で焼いてくれたことを思い出す。肉厚でプリプリのそれに醤油を垂らしてハフハフいいながら頬張っていると、おばあちゃんがにっこりしながら「いいのが入ったから。家族のみんなには内緒よ」と、毎回、人差し指を口に当てつつささやいた。おばあちゃん特製の納豆は、アルゼンチン滞在中に食べた一番のごちそうだった。

和歌山の田舎から始まったおばあちゃんの86年にわたる大冒険は、アルゼンチンの緑あふれる豊かな自然に、見事に完結した。

参考資料

海外移住, 1954年9月20日。

紀伊民報, 1975年4月5日／1975年4月18日。

らぶらた報知, 1954年7月21日／1955年2月2日。

参考文献

榎本澄代, 1956, 「一家をあげて南米移住 幼い双生児を抱えてアルゼンチンで暮らした二年」『主婦の友』主婦の友社, 7: 92-99。

田辺市, 1971, 『田辺市誌 (二)』田辺市。

———, 1982, 『田辺市誌 上巻』田辺市。

津田正夫, 1984, 『ボカ共和国見聞記 知られざるアルゼンチン』中公文庫。

日本人アルゼンティン移住史編纂委員会, 1971, 『日本人アルゼンティン移住史』。

服部豊三郎, 1986, 『アルゼンチン 政治経済進展の歴史 1492-1985』。

前山隆, 1984, 「ブラジル日系人におけるエスニシティとアイデンティティ — 認識的・政治的現象として —」『民族学研究』日本民族学会, 48-(4): 444-458。

———, 1986, 『ハワイの辛抱人』 御茶の水書房。

南部町誌編纂委員会, 1987, 『南部町年表』 南部町。

南部町史編さん委員会, 1996, 『南部町史 通史編 第三巻』 南部町。

ムニョス, ホセ・R・サンチス, 1998, 『アルゼンチンと日本 友好関係史』 JETRO。

和歌山県, 1957, 『和歌山県移民史』 和歌山県。

付記

本論は, 2005 年の『ソシオロジ』(49-3) に掲載された「エスニック・アイデンティティの再想像: 日系アルゼンチン移民社会の経験から」を大幅に加筆修正したものである。

